

教養科目としてのドイツ語 —何を重点的に教えるべきか—

中島 伸

German as general education —what should and should not be taught?—

Shin Nakajima

1. 問題提起

大学における第二外国語としてのドイツ語の授業は、一般教養科目の1つとして扱われ、ドイツ語を専門とする文学部のドイツ文学科や外国語学部のドイツ語学科と比べると、時間数が少ないのは当然のことであり、大学によっては週2時間ないしは1時間というのが現状である。このような限られた状況の中で、教科書通りにドイツ語文法の全ての項目を説明するには、かなり無理が生じる。たとえ、ドイツ語文法の全ての項目の説明を終わらせたとしても、最後の辺りの文法事項の説明を急ぐ形で終わってしまうことになり、聞いている学習者に負担をかける結果となることが多い。しかも、最近では多くの大学が半期で成績評価をつけるセメスター制を導入しているケースが多く、大学によっては半期の間にドイツ語文法の全ての項目を説明しなければならない所もあり、これは通年の授業以上に担当教員や学習者に大きな負担がかかる。

では、どのようにしたら双方に負担をかけずに済むのだろうか。それは、説明に重点を置くべき項目が何なのかを見つけることである。これに該当する項目は、以下の4つであると考えられる。

- ① 定冠詞と不定冠詞の格変化
- ② 動詞の人称変化
- ③ 前置詞
- ④ 枠構造（現在完了形、話法の助動詞、受動態）

本論では、なぜこれら4つの項目が重要なのか、そして、説明の際に注意しなければならない点について述べてみたい。それによって、一般教養科目としてのドイツ語、すなわち、ドイツ語とはどんなものなのかを学習者が理解するのではないのだろうか。

2. 定冠詞と不定冠詞の格変化

定冠詞類の基礎となる定冠詞と所有冠詞や否定冠詞の基礎となる不定冠詞の格変化の説明に重点

を置く必要がある。なお、これらの項目を説明する際、以下に挙げる文法性の配列、そして1格と4格の説明の強調を採り入れた方が良いと考えられる。

2.1 文法性の配列

定冠詞と不定冠詞の格変化の説明をする際に、教科書に表記されている格変化表を使用するが、伝統的に、名詞の文法性は「男性・女性・中性」の順で表記されている。これは、まず名詞を「生物と無生物」という視点で区別をし、それから生物を男女に分けた結果、この順番になったと推定できよう。しかし、この配列について検討する必要がある。これについては、以下の定冠詞と不定冠詞の格変化表を使って述べてみたい。

定冠詞の格変化表

	男性	女性	中性	複数
1 格	der	die	das	die
2 格	<i>des</i>	der	<i>des</i>	der
3 格	<i>dem</i>	der	<i>dem</i>	den
4 格	den	die	das	die

不定冠詞の格変化表

	男性	女性	中性
1 格	<i>ein</i>	eine	<i>ein</i>
2 格	<i>eines</i>	einer	<i>eines</i>
3 格	<i>einem</i>	einer	<i>einem</i>
4 格	einen	eine	ein

上記の2つの表から、次の2点が言える。

- ① 定冠詞・不定冠詞共に男性の2格・3格と中性の2格・3格が同形。
- ② 不定冠詞の男性1格と中性1格が同形。

多くの教科書では上記の2つの表のように、「男性・女性・中性」の順で表記されているが、①と②から、説明の際には、文法性の配列を「男性・中性・女性」の順にした方が、定冠詞の男性と中性の2格と3格、不定冠詞の男性と中性の1格から3格までが同形であることが分かり、学習者にとって理解しやすいのではなかろうか。

2.2 格を示すシグナルの追加

また、定冠詞と不定冠詞が冠詞類の基本形であることから、両者の説明の際には、格を示すシグナルとして、以下の2つの表のように、定冠詞なら d、不定冠詞なら ein の後ろに下線、太字、色分けといった工夫を行えば、定冠詞類、所有冠詞、否定冠詞などの格変化形、そして、形容詞の格変化

(強変化) を理解し易くなるのではなからうか。

定冠詞の格変化表 (修正版)

	男性	中性	女性	複数
1 格	<u>der</u>	<u>das</u>	<u>die</u> ¹⁾	<u>die</u>
2 格	<u>des</u>		<u>der</u>	<u>der</u>
3 格	<u>dem</u>		<u>der</u>	<u>den</u>
4 格	<u>den</u>	<u>das</u>	<u>die</u>	<u>die</u>

不定冠詞の格変化表 (修正版)

	男性	中性	女性
1 格	<u>ein</u>	<u>ein</u>	<u>eine</u>
2 格	<u>eines</u>		<u>einer</u>
3 格	<u>inem</u>		<u>einer</u>
4 格	<u>enen</u>	<u>ein</u>	<u>eine</u>

2.3 1 格と 4 格の説明の強調

2.3.1 文中における格の機能

1 格から 4 格のうち、所有を表す 2 格は名詞に掛かり、動詞の目的語としての関わりは殆どなく²⁾、受益者を表す 3 格³⁾は、helfen などの 3 格目的語をとる動詞、そして、geben などの 3 格と 4 格の目的語をとる授与動詞⁴⁾の目的語として使われることから、2 格と 3 格は使われるケースに限りがあ

る。しかし、1 格と 4 格に関しては事情が異なる。そもそも、1 格は文の主語を表し、ヴァレンツの関係上 1 格を置かないと文として成立しない⁵⁾。そして、4 格に関しては動詞の目的語として使われることが多い⁶⁾。よって、文中では 1 格と 4 格が使われるケースが多いことが言える。

2.3.2 定冠詞と不定冠詞の 1 格と 4 格

中性・女性・複数 (定冠詞のみ) の 1 格と 4 格が同形である。これは、英語 (the, a [an]) と同様に主語-目的語の文法的な区分には役立たない。しかし、男性の場合、定冠詞が der—den、不定冠詞が ein—einen と形が異なることから、文法的な区分に役立つ。当然、定冠詞と不定冠詞が基礎となる冠詞類、形容詞の格変化語尾、定関係代名詞、そして、名詞を指示する 3 人称代名詞 er, es, sie でも該当することから、男性以外の 1 格と 4 格が同形であることを触れる必要性があろう。

3. 動詞の人称変化

3.1 教科書における現在人称変化の説明箇所とその説明方法

3.1.1 現在人称変化の説明箇所

伝統的に、教科書内における動詞の現在人称変化の説明記述は、発音の説明箇所の後の第 1 課に

挙げられている。その理由は、動詞には語り手が事象を事実として捉えているか、またはそうでないかを表す叙法⁷⁾という機能を持っているからであると考えられる。よって、人称変化は現在だけでなく、過去と接続法についても説明に重点を置く必要がある。

3.1.2 従来の現在人称変化の説明方法

動詞の現在人称変化を説明する際、まず不定詞の仕組みについての説明をし、以下の表を使って主語に応じて語尾が変化することを説明する。

	単数		複数	
1 人称	ich	kom <u>me</u>	wir	kom <u>men</u>
2 人称 (親称)	du	kom <u>st</u>	ihr	kom <u>mt</u>
2 人称 (敬称)	Sie kom <u>men</u>			
3 人称	er es sie	kom <u>mt</u>	sie	kom <u>men</u>

しかし、3 人称の現在人称変化を説明する際、少し問題が生じる。それは、3 人称の人称代名詞とされている er, es, sie の機能についてである。1・2 人称の人称代名詞 ich, wir, du, ihr, Sie を含む人称代名詞の特徴について触れるにあたって、まず人称とはどのようなものなのかについて述べてみたい。

3.2 人称とは何か

人称とは、日本語には存在しない次の2つを記述するために必要となった文法カテゴリーである。

① 主語と述語動詞の形の対応

人称というカテゴリーが印欧語の記述に必要となったのは、印欧語固有の文構成の仕組みである呼応のためと推定できよう。主語が単数か複数かに応じて、述語動詞の語尾に違いが見られる。

② (ヴァレンツに対応する) 人称代名詞の体系

ドイツ語にはヴァレンツの事情があり、必須文成分が聞き手にとって自明なことであっても、省略して空位のままにすることが不可能で、「格要素の存在」を示す必要がある。この空位を埋める機能を持っているのが、3 人称代名詞 er, sie, es であると考えられる⁸⁾ (以下の文中の傍線は原則として筆者による)。

(1) Hast du den Roman „Der Tod in Venedig“ schon gelesen?⁹⁾

小説「ヴェニスに死す」はもう読みましたか？

—Ja, ich habe ihn schon gelesen.

ええ、もう読みました。

なお、人称には1 人称・2 人称・3 人称という3つの区分がある。

3.3 人称代名詞の特徴

3.3.1 1・2人称代名詞 ich, wir, du, ihr, Sie

1・2人称代名詞 ich, wir, du, ihr, Sie は、発話場面における特定の語り手と特定の聞き手を指す人称代名詞である。これらは特定の発話場面から見ないと指示物が理解できない語、すなわちダイクシス表現¹⁰⁾に属する。

(2) Lernst du Deutsch?—Ja, ich lerne Deutsch.

ドイツ語を習っているの?—はい、習っています。

上記の例文中の du と ich は、それぞれ特定の語り手、特定の聞き手を表し、これらは発話の場に居合わせていなければいきなり使っても誰を指示しているのかわかる。また、特定の語り手と特定の聞き手の自然性の区別はない。

3.3.2 3人称代名詞 er, es, sie

伝統的に、動詞の現在人称変化表の中で3人称の人称代名詞として挙げられている er, es, sie¹¹⁾ は、本来、言語テキスト内の先行する名詞を指示する代名詞である。これらは、既に言及されているものを遡って指示する働きを持つ前方照応¹²⁾に属し、先行の男性名詞・中性名詞・女性名詞に対応して3つの形がある。その理由は、印欧語の文構成の仕組みである呼応にすぎない、つまり名詞を繰り返す代わりにの代理形であるから名詞の3つの文法性に呼応する必要があり、自然性の区別ではない。また、複数の sie も先行する名詞を指示する代名詞である。ただし、これは文法性の区別に関係ない複数名詞を指示することから形は1つしかない。

(3) Ich habe den Roman gelesen. Er gefällt mir sehr gut.

その小説を読みました。とても気に入りました。

(4) Ich kenne das Gedicht. Es ist von Heine.

その詩を知っています。ハイネの詩です。

(5) Diese Geschichte gefällt mir nicht, sie ist langweilig.

この物語は気に入らない。退屈だ。

(6) Da spielen Kinder. Sie sind alle unsere Nachbarskinder.

あそこで子供たちが遊んでいる。皆近所の子供だ。

(3)の er は先行の男性名詞を Roman の代理、つまり Roman を指示する。以下、(4)の es は中性名詞 Gedicht を、(5)の sie は女性名詞 Geschichte を、(6)の sie は複数名詞 Kinder を指示する。この場合、ダイクシス表現である ich, du, wir, ihr, Sie のように、いきなり er, es, sie を使うことはできない。

3.4 3人称の説明

前章の内容から、3人称の人称代名詞として挙げられている er, es, sie は、必ずしも「人」を指示するとは限らないので、厳密に言う、人称は1・2人称に限定して、3人称という呼び方は避けて「名詞」と呼んだ方が良く考えられる¹³⁾。しかし、独和辞典等でも3人称という名称が定着し

ているため、教育上 3 人称という用語を使い、従来のような人称変化表内で er, es, sie を使った方が混乱を招く恐れはないだろう。

よって、1・2 人称の人称代名詞以外が主語の場合、単数なら -t, 複数なら -en という語尾になると説明すれば問題ない。なお、その際、前章で挙げた er, es, sie の機能についての説明も行う必要がある。しかし、既に触れたように、教科書内の現在人称変化の説明箇所は発音の説明箇所の直後、すなわち文法性や定冠詞・不定冠詞の格変化といった名詞の説明箇所の前に挙げられていることから、確認のための例文中に冠詞の付いた名詞を挙げるのには少し問題が生じる。

では、冠詞付きの名詞の代わりに何を挙げれば良いのか。それは、Hans や Erika といった冠詞の付かない人名を挙げれば問題ないのではなかろうか。以下のような例文を挙げれば、人称変化形だけでなく、er, es, sie の機能を理解することができるのではないのか。

- (7) Hans kommt gleich.
ハンスはすぐ来る。
- (8) Ich kenne Erika. Sie wohnt in Kyoto. (Sie=Erika)
エリカを知っている。京都に住んでいる。
- (9) Ich kenne Erika und Hans. Sie wohnen in Kyoto. (Sie=Erika und Hans)
エリカとハンスを知っている。京都に住んでいる。

当然、「人」以外の名詞を指示する er, es, sie を使った説明は、名詞の説明箇所で説明する必要がある。

3.5 ドイツ語の人称変化の特徴

複数が主語の場合、現在・過去・接続法、そして話法の助動詞の人称変化では、語尾がほぼ一致する¹⁴⁾。しかし、単数が主語の場合、以下のように 2 人称 du が主語の時、語尾は -st となるが、1 人称 ich と 3 人称 er/es/sie に関しては現在人称変化のみ語尾、つまり定動詞の形が異なる。

	現在	過去	接続法 I 式	接続法 II 式	話法の助動詞
人称	kommen	kam	komme	käme	können
ich	<i>komme</i>	<i>kam</i>	<i>komme</i>	<i>käme</i>	<i>kann</i>
du	kommst	kamst	kommest	kämeest	kannst
er/es/sie	<i>kommt</i>	<i>kam</i>	<i>komme</i>	<i>käme</i>	<i>kann</i>

よって、過去人称変化または話法の助動詞の人称変化の説明の際に、これについて言及する必要がある。

4. 前置詞

4.1 前置詞の体系

ドイツ語の前置詞は、「が」・「を」以外の日本語の格助詞の全てに対応し、中核部分は場所に由来する¹⁵⁾。その理由は、人間の認知も言語表現も(目に見え触れることも可能な)具体的な空間関係の

認識を土台にして、それを比喩的に発展させて、(目に見えない) 抽象的な「時点・様態・因果関係」に転用しているからであろう。よって、場所を表す表現の理解、そして英語との用法の違いを理解させるためにも、説明に重点を置く必要がある。

[空間] in diesem Zimmer この部屋の中で

[時点] in diesem Jahr 今年

[様態] in aller Ruhe 落ち着いて

[因果] In seiner Angst lief Hans zum Arzt. 不安になってハンスは医者に駆け込んだ。

なお、場所を表す前置詞は次の3つの表に区分される。

基幹位置前置詞

	近接	接触
前後	vor, hinter	an
上下	über, unter	auf, an
横	neben	an
下	in, zwischen	

同位置を表す前置詞

	近接	接触
同位置	bei	mit

移動関係を表す前置詞

	近接点	内部接点
起点	von	aus
通点	über (表面通過), um (迂回)	durch (中を通過)
着点	zu, nach	in (+ 4格)

4.2 基幹位置前置詞の重要性

ドイツ語の前置詞は決まった格と共起する。これが前置詞の格支配である。前置詞の中には4格と共起するものもあるが、3格と共起するものの方が多い。

4格支配の前置詞：um, durch

3格支配の前置詞：bei, mit, zu, nach, von, aus

教育面から見ても、これらの前置詞は意味と共起する格さえ覚えれば何ら問題はない。しかし、基幹位置前置詞に関しては「前後—上下一横—中」という基本的な場所の意味を表し、また、結びつく格が場所を表すときは3格、方向を表すときは4格というように、2つの格と共起し、これは以下の例文のように、基幹位置前置詞と共に使われている定動詞の意味から判断しなければならない。

(10) Wir spielen in dem Park.¹⁶⁾

私たちは公園で遊ぶ。

(11) Wir gehen in den Park.¹⁶⁾

私たちは公園に [歩いて] 行く。

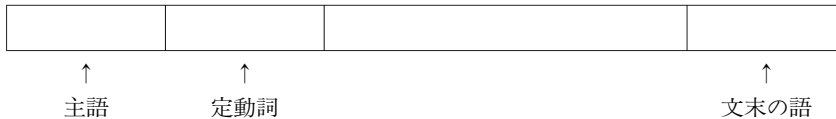
(10)の spielen は「…(の場所) で遊ぶ」という意味から in は 3 格と、(11)の gehen は「…(の方向) へ [歩いて] 行く」という意味から in は 4 格と結びつく。

よって、基幹位置前置詞の説明に重点を置く必要があると考えられる。

5. 枠構造

5.1 枠構造とは

これは、ドイツ語の配語法においてあらゆる面で現れる特徴であり、特に意識しなければいけないのは、定動詞と文末の語とが構成する点である。



つまり、定動詞と最も緊密に結びつく語または語句が文末を占め、定動詞と共に枠の構造を作る。これが文の骨組みとなる。よって、英語の助動詞構文との違いを理解させるためにも、説明に重点を置く必要がある。なお、枠構造を使う構文は、現在完了形、話法の助動詞、分離動詞、受動態であるが、このうち分離動詞以外の3つの項目に関しては説明の際に注意すべき点があるので述べてみたい。

5.2 現在完了形

会話において過去の事象を表す現在完了形は、haben と sein が助動詞として定動詞の位置に置かれ、文末に過去分詞が使われることから、haben と sein の現在人称変化、そして動詞の三基本形の一つである過去分詞を覚えさせることは言うまでもない。しかし、現在完了形の説明の際に注意すべき点の一つがある。それは、以下のように haben や sein を定動詞にした現在形の文を現在完了形に書き換える説明である。

(12 a) Ich habe einen Sportwagen.¹⁷⁾

私はスポーツカーを持っている。

(12 b) Ich habe einen Sportwagen gehabt.

私はスポーツカーを持っていた。

(13 a) Ich bin Arzt.¹⁸⁾

私は医者です。

(13 b) Ich bin Arzt gewesen.

私は医者だった。

これについては多くの教科書でも挙げられているが、上記の例文のように、本来助動詞として使われる *haben* や *sein* を定動詞にした現在形の文を過去の表現にする際、過去形にするケースが多い。

(12 a) Ich habe einen Sportwagen.

(12 c) Ich hatte einen Sportwagen.

私はスポーツカーを持っていた。

(13 a) Ich bin Arzt.

(13 c) Ich war Arzt.

私は医者だった。

また、助動詞として使われる *haben*・*sein* を過去分詞にする文章は、学習者に混乱を招く恐れがあるのではないのか。

5.3 話法の助動詞

話法の助動詞構文は、話法の助動詞が定動詞の位置に置かれ、不定詞が文末に置かれることから、話法の助動詞の現在人称変化を覚えさせることは言うまでもない。なお、話法の助動詞には、主観的用法と客観的用法という2つの用法があると分析されている。

5.3.1 話法の助動詞の主観的用法

主観的用法とは、客観的な事象の確実度の差を動詞の叙法だけでは表しきれない場合、語り手の主観的判断を付け加えて表現するものである。この確実度の度合を、Sengoku ([1997] S. 241) は、以下のように主観的用法の意味に対応する話法詞を添えた形で4つ (Stufe I ~IV) に区分している。

[Stufe I]

Hoher Grad (vergleichbar mit dem Modalwort *sicher* ; 80%): MUSS

(14) Hans muss dabeigewesen sein.

ハンスはそこにいたに違いない。

[Stufe II]

Mittlerer Grad (vergleichbar mit den Modalwörtern *wahrscheinlich*-*möglicherweise* ; 70-50%): DÜRFTE, (WIRD¹⁹), MAG, KANN

(15) Hans dürfte (wird/mag/kann) dabeigewesen sein.

ハンスはそこにいたかもしれない。

[Stufe III]

Niedrigerer Grad (vergleichbar mit dem Modalwort *angeblich* ; ? 70-10%): SOLL, WILL

(16) Hans soll (will) dabeigewesen sein.

ハンスはそこにいたそうだ。

[Stufe IV]

Niedriger Grad (vergleichbar mit dem Modalwort *kaum* ; 5%) : KANN-NICHT

(17) Hans kann nicht dabeigewesen sein.

ハンスはそこに居たはずがない。

5.3.2 話法の助動詞の客観的用法

Sengoku ([1997] S. 249-250) 及びそれに対する修正案を Shimizu (S. 200) の記述に従うと、客観的用法とは「実現一步前の状態 (実現前の潜在的状態)」を表し、話法の助動詞は以下のように、実現が動作主の意志、他人の意志、因果関係の圧力の3つに分析される。

① 動作主の意志で実現するもの : wollen/mögen-möchten

(18 a) Hans will die Blumen mitnehmen. (持っていこうと思っている)

(18 b) Hans möchte die Blumen mitnehmen. (持って行きたがっている)

② 他者の意志で実現するもの : sollen/dürfen

(19 a) Hans soll die Blumen mitnehmen. (持って行けと言われている)

(19 b) Hans darf die Blumen mitnehmen. (持っていくことが許されている)

③ 因果関係の圧力で実現するもの : müssen/können

(20 a) Hans muss die Blumen mitnehmen. (持っていく他はない)

(20 b) Seine Tochter kann schon laufen. (もう歩けるようになっている)

Sengoku (1999 Revidierte Version) では、以下のように6個の話法の助動詞の客観的用法の分析を日本語と対照させて表にまとめている。

Quelle der veranlassend-erzwingenden Kraft			
Subjekt (Agens)		Nicht-Subjekt	
voluntativ		kausal	
aktiv	WOLLEN <i>tai (tagaru)</i> (gewillt)	SOLLEN <i>bekida</i> (aufgefordert)	MÜSSEN <i>nebanaranai</i> (notwendig)
passiv	MÖGEN-MÖCHTEN (geneigt)	DÜRFEN <i>temokamawanai</i> (erlaubt)	KÖNNEN [a] <i>reru</i> (möglich)

5.3.3 客観的用法の重要性と möchten の説明

主観的用法と客観的用法の構文における特徴について述べてみると、前者では状態を表す不定詞 (特に sein や完了形) がふつう要求されるのに対し、後者では状態以外を表す不定詞がふつう要求される。よって、要求される不定詞の種類が多い点と頻度面から見ても²⁰⁾、客観的用法を中心に説明した方がよいと考えられる。

次に, möchten の説明についてだが, これは厳密に言う, mögen の接続法Ⅱ式 möchte という形にしなければならない。しかし, 教科書では接続法の説明箇所が最後に挙げられていることが多い, mögen の別形であると説明すればよいと考えられる。その際, 他の話法の助動詞と同様に „möchten“ と möchte に „n“ を付けた形で説明した方が混乱を招く恐れはないだろう²¹⁾。

5.4 受動態

受動態は, werden が助動詞として定動詞の位置に置かれ, 文末に過去分詞が使われることから, werden の現在人称変化と過去分詞を覚えさせることは言うまでもない。しかし, 受動態の説明の際に注意すべき点がある。それは状態受動の説明である。状態受動は, 以下のように sein が助動詞として定動詞の位置に置かれることから, 現在完了形と全く同じ構文になる。

(21) Das Fenster ist geschlossen.²²⁾

窓が閉められている。

この場合, 過去分詞の不定詞の意味の違いから, 現在完了形か状態受動かの判断が可能であるものの, ドイツ語を初めて学ぶ学習者にとって, 両者の構文が全く同じであることが混乱を招く要因であると考えられるので, 受動態の説明は werden+過去分詞の構文だけを説明した方がよいのではないのか。

6. おわりに

本論では, 一般教養科目としての第二外国語のドイツ語の授業において, 定冠詞と不定冠詞の格変化, 動詞の人称変化, 前置詞, 枠構造が重点的に説明されるべき項目であるということについて扱った。もちろん, 本論で扱った4つの項目以外にも説明しなければならない。これについては, 前置詞に関しては他の項目との関連性はあまりないものの, 定冠詞と不定冠詞が冠詞類の基となっている点, 動詞の人称変化は現在以外, 1人称単数と3人称単数が主語の場合は同形になる点, 枠構造については, 一度仕組みを説明すれば, あとはそれぞれの用法, そして定動詞の位置と文末に何を置くのかを理解すればよい点さえ説明しておけば, 懸念となっている, 通年または半期でドイツ語文法の全ての項目を説明できるのではないのか。

注

- 1) 定冠詞の女性と複数の1格と4格は全て die という形であるにも関わらず, 定冠詞の男性と中性の2格と3格のように一語で表記していないのは, 印欧語では単数と複数の区別が明確だからである。
- 2) 2格目的語をとる動詞は bedürfen, gedenken などである。
Die Gesunden bedürfen eines Arztes. (国松他 [編] 286 頁)
健康な人に医者はいらない。
Ich gedenke gern jener schönen Urlaubstage. (国松他 [編] 835 頁)
あのすばらしい休暇のことをよく思い出す。
- 3) 3格には, 以下のように「目標」を表す機能もあるが, 3格の大部分は受益者規定に対応する(千石[1983] 8, 10 頁)。
Ein Schiff nähert sich der Küste. 一隻の船が海岸に近づく。

- 4) Eisenberg (S.288) は、授与動詞を dass-文章と共起する動詞 (sagen, mitteilen など) と共起しない動詞 (geben, schenken など) の 2 つに区分し、前者に属する動詞は「コミュニケーションを表す動詞」としている。
- 5) regnen (雨が降る), schneien (雪が降る) のように、動詞の意味に 1 格が存在する動詞の場合、非人称の es を使うケースがこれに属する。
- 6) ドイツ語では 4 格目的語をとる動詞のことを他動詞と呼ぶ。
- 7) これは直説法と接続法に区分され、前者は語り手が事象を事実として捉えていることを表す機能を持ち、後者は語り手が事象を事実として捉えていないことを表す機能を持つと分析されている。さらに、直説法と接続法は以下のように区分される。

・直説法

1. 直説法現在

語り手が現実の事象と捉えていることを表す際に使われる。

2. 直説法過去

語り手が回想として捉えている事象を表す際に使われる。

・接続法

1. 接続法 I 式

語り手が願望, 思い浮かべただけの内容, 有り得ることとして捉えている事象を表す際に使われる。

2. 接続法 II 式

直説法過去を土台にしてつぐられ, 語り手が有り得ない願望, 思い浮かべただけの内容, とても有り得ないことと捉えていることを表す際に使われる。

- 8) 指示代名詞 der, die, das にも同じ用法があるが、両者の違いは「情報伝達における重要度の違い」であると考えられ、人称代名詞には情報伝達上の意味はない。しかし、指示代名詞には聞き手の注意を向かせるという情報伝達上の意味がある。よって、人称代名詞は目立たない位置に現れるが、指示代名詞は以下のように、目立つ文頭に現れると考えられる。

Hast du den Roman „Der Tod in Venedig“ schon gelesen?

小説「ヴェニスに死す」はもう読みましたか?

—Nein, den habe ich noch nicht gelesen.

いや、それはまだ読んでいません。

- 9) 引用文は全て現正書法に改めてある。なお、以下出典のない用例は小学館独和大辞典と新コンサイス独和辞典からの例文を利用したものである。
- 10) ダイクシスには「人称・場所・時」という 3 つの表現があり、1・2 人称の人称代名詞 ich, wir, du, ihr, Sie は人称のダイクシスに属する。また、所有冠詞 mein, unser, dein, euer, Ihr もこれに属する。なお、場所と時のダイクシスに属する語は以下の通りである。

・場所のダイクシス

1. 静止位置のダイクシス

場所の副詞 hier, dort, da; 指示代名詞 dieser, jener

2. 動きの方向のダイクシス

分離動詞の半接頭辞 her-/hin-

・時のダイクシス

1. 日時を表す副詞

heute, morgen, gestern

2. 時点そのものを表す副詞

jetzt, vorhin, nachher/später

なお、場所と時のダイクシスの特徴に関する詳細は中島 ([2006] 49-59 頁) を参照。

- 11) Engel (S. 82) は、Personalpronomen (人称代名詞) を 1 人称と 2 人称に限定し、er, es, sie を „reine Verweispronomen (純粹指示代名詞)“ と呼んで区別している。
- 12) 指示代名詞 der, dieser, jener も既出の名詞を指示する機能を持つ。
Frau Meyer war mit ihrer Tochter; diese trug einen Hosenanzug, jene ein Kleid.
マイヤー夫人と娘が来ていた、後者 (娘) はパンツスーツ、前者 (母) はワンピースを着ていた。
また、前方照応には、zu Hause などの場所指示句を指示する機能もあり、da がこれに属する。
Peter bleibt zu Hause. Er kann da besser arbeiten. (Ehrich S. 26)
ペーターは家にいる。そこでもっとよく仕事ができるのだが。
- 13) ich, du をそれぞれ 1 人称、2 人称と呼んだために、それに引きずられて通常の名詞句を 3 人称 (der 3. Person) と呼ぶことになったのではと考えられる。
- 14) sagte, spielte のように過去基本形と接続法 II 式が „e“ で終わる場合、1 人称複数 wir と 3 人称複数 sie が主語の際、語尾は „n“ となる。
- 15) 場所以外の意味を持つ前置詞は、時点・様態・因果関係を表し、これらは二次的に名詞や動詞からつくられたものである。
[時点] während, seit, bis
[様態] ohne, statt
[因果関係] für, wegen, trotz
また、これらの前置詞は 2 格または 4 格と共起するものが多い。
- 16) 石塚/杉本 27 頁
- 17) 濱川 [監] 608 頁
- 18) 濱川 [監] 1237 頁
- 19) 主語が 1 人称または 2 人称の場合、werden は「語り手の意志」を表す (Sengoku [1999] S. 21)。
Ich werde doch hingehen. 行こう。
Wirst du doch hingehen? でも行こうな。
- 20) これについては文学作品等での頻度調査を行う必要があるが、独和辞典における意味記述では客観的用法の意味が先に挙がっている点から、客観的用法の方が使われると考えられる。
- 21) 独和辞典やドイツで出版されているドイツ語学の専門書では、まだ „möchte“ という形でしか挙げられていないが、頻度面から考えても、近い将来 „möchten“ という形で挙げられることが考えられる。
- 22) 石塚/杉本 50 頁

文献一覧

1. 参考文献

- Eisenberg P (1999) Grundriß der deutschen Grammatik Band 2: Der Satz. J.B. Metzler, Stuttgart und Weimar
- Engel U (1996) Deutsche Grammatik. Groos, Heidelberg
- Ehrich V (1992) Hier und Jetzt. Niemeyer, Tübingen
- 石塚秀樹/杉本省邦 (2006) ドイツ語の窓—初学者の視点から—。東洋出版, 東京
- 岸谷敏子 (2001) 言語研究における「話者 (Sprecher)」の概念について。ことばを考える 4 (愛知大学言語

学談話会), 33-52

中島伸 (2006) 発話場面と言語テキストとの関係一言語の伝達機能とダイクシスー. ドイツ文学論集 (日本大学文理学部ドイツ文学科研究室) 27号, 41-68

中島伸 (2007) 教科書における定動詞の現在変化語尾の記述に関する問題点—文法性の配列にも触れて—. リュンコイス (日本大学桜門ドイツ文学会) 40号, 205-222

千石喬 (1983) 文構造のための文成分分類—特集にあたって—. ドイツ文学 (日本独文学会) 71号, 1-13

Sengoku T (1997) Gewißheit und Potentialitätsart als Verbalkategorien der Modalverben
—Mit deutsch-japanischer Kontrastierung—. In: Sprache, Literatur und Kommunikation im kulturellen Wandel. 同学社, 東京 237-261

Sengoku T (1999) Modalverben [Y] OO und MAI im Japanischen und WERDEN im Deutschen. In: Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen. Iudium, München 11-24

Shimizu M (1999) Zum Wortfeld der Modalverben im Deutschen. In: Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen. Iudium, München 213-228

2. 辞書

濱川祥枝 [監] (2008) クラウン独和辞典 [第4版]. 三省堂, 東京

早川東三 [編] (1998) 新コンサイス独和辞典. 三省堂, 東京

国松孝二他 [編] (1990) 独和大辞典. 小学館, 東京